資料渉猟余話

その99

一枚の写真から ⑦
中里介山の天龍峡来遊

鎌倉 貞男

今回は、大衆文学の先駆者、中里介山の写真である。

中里介山（一八八五～一九四四）は、東京都出身の小説家である。本名、弥之助。代表作には、聖徳太子に材をとった『夢殿』、法然上人を描いた『黒谷夜話』などあるが、何と言っても長篇時代小説『大菩薩峠』が名高い。

『大菩薩峠』は、四十一巻にのぼる未完の一大巨編である。大正二年「都新聞」に発表されて以降、「東京日日新聞」「国民新聞」と、掲載紙を変えながら断続的に昭和十六年まで書き継がれた。幕末が舞台で、盲目の剣客机竜之助が主人公である。

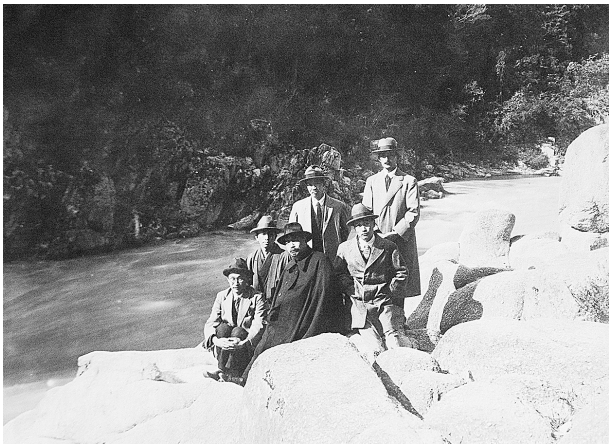
その作家、介山は生涯に三度来峡している。昭和四年十一月・同十二年七月・同十六年十月の三回である。いずれも、彼（か）の北原阿知之助（痴山）の二男北原謙司（一九〇〇～一九七八）との関わりにおける来峡である。それらの経緯と詳細は『愚山 北原謙司硯滴集』（昭和六十年・北原菊太郎発行）に詳しいので、以下、それに添って述べる。

写真はその第一回、昭和四年晩秋のものである。この時、介山は、飯田商業学校での講演のために来飯した。それは、門人を自認する愚山が依頼して実現させたらしい。滞在三日間の様子を、前書にある愚山の日記から抜き出してみよう。

十一月二日　介山先生がくるので大島駅迄出迎へる。朝八時家に到着。滝沢馬琴に比すべき文豪を我が家に招じることは無上の光栄。少憩の後、今宮公園の丘へ案内して伊那の大観をお目にかける。半は、門人を自認する愚山が依頼して実現させたらしい。滞在三日間の様子を、前書にある愚山の日記から抜き出してみよう。

十一月二日　介山先生がくるので大島駅迄出迎へる。朝八時家に到着。滝沢馬琴に比すべき文豪を我が家に招じることは無上の光栄。少憩の後、今宮公園の丘へ案内して伊那の大観をお目にかける。半は、門人を自認する愚山が依頼して実現させたらしい。滞在三日間の様子を、前は揮毫。午後一時から飯田商業学校の講堂で「信仰と文芸」と題し、約一時間半の講演。聴衆五百有余、感銘を与う。夜は七時から文星堂ホールで下伊那大菩薩峠会主催による座談会。大盛会なり。

十一月四日　先生は本日中に帰京されるので、朝九時市田村出砂原より、先生・岩崎清美（飯田町収入役で郷土史家）・僕と他に大阪方面の団体客数名と乗船天龍下り。天龍峡で中原謹司（後に革新倶楽部代議士）・青柳甲子雄（東日特派員）・田中武之助の諸氏と会し、河畔で記念撮影をしてから龍角峰で少憩。帰途、開善寺の古刹を訪い、午後一時半のバスで大平峠越へ、帰京さる。（但し、同書別項では、舟ではなく、バスで天龍峡へ向かったとある）



中里介山（前列中央）を囲む記念写真

これを読むと、撮影前後の様子がわかる。写真は、前列中央が中里介山、左端が北原謙司、後列右端が岩崎清美、左端が中原謹司である。

以後、介山は二度、三度と謙司を訪ねて伊那谷を訪れ、同氏宅に泊まった。これを記念すべく、謙司は、後年（昭和四十八年）、彼が二度目の来泊時に詠んだ句（伊那谷は星美しき端居かな）を刻んだ句碑を自庭に建立した。この句の通り、介山も伊那谷を気に入っていたらしい。

地域にはこの種の写真もまだ多く遺されていると思う。もし発見されたら、お知らせいただき、ぜひ見せていただきたいものである。

（故人敬称略）